

大友氏エッセー大募集

～2022年は、大友初代能直公生誕850年 3代頼泰公生誕800年の節目の年～

テーマ 「私の大友宗麟」「私の大友氏」

特選・入選作品ご紹介

上記のように今回初めてエッセーを募集し、35点の応募がありました。いずれも甲乙つけがたく、苦渋の選択でした。とりあえず特選・入選の計8点を HP 上に掲載させていただきましたが、後の全作品は10月発行の『大友氏の風景(11)』に掲載します。ご期待ください。

【特選／1点】

私の大友宗麟

大分市東春日町

工藤 和子

私が「大友宗麟」のことを書くとしても、全く表面的なことしか知らないし、歴史に名を刻む戦国大名の背景などは、直ぐには調べようもない。ただ、宗麟の末裔の大友義介先生との不思議な出会いを通して、そこから辿ってみたいと思う。

話は古くなるが、大分県立芸術会館がオープンした時、特別展として、「大分の千年展」が開催され、そこに社会の教科書に載っていた日本最初のキリスト教宣教師フランシスコ・ザビエルの画像が、大分縁のある人として飾られていた。

私は「千年展」に赴いた時、カトリック信者の一人として、そのザビエル画像の前で、戦国時代に、大友宗麟の教会保護により、当時の府内「大分」で活発な布教活動をし、日本教会の中心人物であったザビエルをじっと見つめていた。

その時、すぐ傍で私の名前を呼ぶ人があり、振り向くと、この展覽会に東京から招待され、学芸員に案内されて、やはりザビエルの画像を観に来られた大友義介先生と、同じ場所で、予期せぬ再会をした。

大友先生は私の母校の教授であったが、私は学部が違うので、卒業時、父と二人で挨拶に伺った折、一度お会いしただけで、帰郷して数年後の私を覚えていてくださったことにも驚いたが、それから何か時空を超えて見えないものの力を感じ、私にとっては小さな奇蹟として、ずっと記憶の中にあつた。

先生は帰京なさってから、その時芸術会館と一緒に撮った写真を同封し、一通のお手紙を送ってくださいました。

手紙の中には、宗麟公の新しい墓所が津久見に完成し、その日招かれた際の鎮魂ミサの中で詠まれた歌が八首程記されており、大友先生の祖先や宗麟公を時代を超えて偲ばれるお気持ち伝わり、深く感銘を受けた。

宗麟公鎮魂みさ (手紙より抜粋)

◎遠つ祖先おやの大き祭りに招かれて

天翔あめかけり来ぬふかきおもひに

◎名にし負ふきりしたん大名大友宗麟の

鎮魂みさに映ゆるおくつき

◎秋日てる宗麟公のおくつきに

かしこみかしこみ 花たてまつる

大分での再会の際、一つの面白いエピソードがあって、元上田保大分市長さんは、大友先生の義介よしあきらというお名前を「ぎすけさん」と呼ばれると言われたのが、楽しい思い出として残っている。

このような芸術会館での大友先生とのご縁から、大分では名高い大名であるが、あまり詳しくは知らなかった宗麟公が急に身近に感じられ、特にフランシスコ・ザビエルとの当時の関係(何故か新聞などには二人がいつもセットで載ることが多いので…)に、自ずと一県民としても、クリスチャンとしても、より興味を抱くようになった。

大友宗麟は、戦国大名として初めはキリスト教より、貿易に関心があつたと思うが、宣教師らとの交流を通して、キリスト教文化や医療の分野にまで広く触れることにより、まだ日本では開けていなかった世界へと目を向け、その頃、既に九州一のキリシタン大名として、天正少年遣欧使節の派遣(伊東マンシヨ)をし、国際的な視野の持ち主でもあった。

尚、現在、顕徳町にデウス堂跡が保存され、遊歩公園にキリスト教文化の記念像が幾つか残されているが、私は外科医でもあったアルメイダ修士に特に惹かれる。貧しい子供たちを救おうとし、孤児院の計画を立て、そこに病院を併設することにし、これがアルメイダ病院の起りごと知り、現代まで名が残るもの一つとして誇りに思う。

大友宗麟の歴史的な功績を知るにつけ、若い頃の私は都会や日本人なら誰でも知っているような名所・旧跡に惹かれていたが、今は大分の派手さはないが、豊かで美しい自然、飾らぬ人情、歴史的にも早く西洋の文化が花開いた地として、地元への愛をしみじみと感じている。

大友先生との再会は、外へ目を向けていた私に、宗麟の時代を思い起こさせ、郷土愛を呼び覚まして下さり、意味深いものであった。

さて、七十代になった私の胸に響き来るものは、かつて北部九州を支配していた大名・大友宗麟が、洗礼までの道程は長かったが、フランシスコの名をいただいて受洗したことである。やはり、フランシスコ・ザビエルとの精神的な出会いが大きかったのであろうか。その後、次第に大友家が崩れゆく中で、戦さの世の虚しさを感じ、魂の救いのために導かれたのかもしれない。

当時の宗麟の立場上、そう容易いものではなかったであろう改宗、キリシタン大名としてのその前後の心境を、遠い戦国の世に想いを馳せ、想像している私がいる。

【評】テーマ「私の大友宗麟」を最後まで貫徹している。大友義介先生との出会い、大分県立芸術会館のオープン特別展「大分の千年展」での大友義介先生との再会も、著者と大友氏との運命的な縁を感じさせる。また、津久見の磯崎新先生の宗麟墓所の完成と、その際の鎮魂ミサでの歌や、上田保元市長が大友義介先生を「ぎすけさん」と呼んでいたエピソードなどは、まさに歴史の1ページといえるだろう。その後、学んだ歴史的知識についても、自身の感想、思いを逐一記述してくれている。最後の「遠い戦国の世に想いを馳せ、想像している私がいる。」の一文は、このエッセーの結びとしては見事である。文章構成も秀逸。

【入 選 / 7 点】

弟と宗麟と私

国東市国東町東

安達 郁雄（82歳・塾講師）

確か、末の弟が小学五年の夏だったと思う。大学（三年）から帰省していた私に、「兄ちゃん、大友宗麟って知ってる？」と聞いてきたので、私は「うーん」と答えた。が、文字にすると「もちろん」ということになるが、実際はそうでもなかった。弟の前を繕っての生返事だったのである。

が、弟は「知っている」と思ったのだろう。私に聞いてきた。「宗麟の出家前の名前は？」と。私はてっきり「宗麟」が本名だと思っていたから、「宗麟が出家？」と聞き返した。キリシタン大名としての知識しかなかったので、仏門に入ったなど初耳だった。

この時点で「実は、『キリシタン大名』ぐらいしか知らないんだ」と言っていれば恥はかかず、威厳は保てただろう。が、大学生だというプライドが邪魔して白旗を揚げなかったものだから、次の質問を浴びた。「『二階崩れの変』ってどんな事件？」と。

「何々の変」とはよく聞くが、大友宗麟に関してそんなものがあつたとは全然知らない。そこで、「ちよつと待て、今調べてやるから」と言つて父の書架から歴史大事典を引っ張り出してきて調べたのだつた。

この事典のおかげで宿題（『夏の友』）の答えはあらかた解けたが、私もそれで多くのことを知ることが出来た。後に「あなたの出身は大分ですね、ちよつと教えて。大友宗麟は：」と聞かれても、後ずさりすることはなくなった。逆に、積極的に話題にすることもあつた。

ところで、私は時々人との出会いに運命的なものを感じることがある。もしこの人や書物に出会わなかったら現在の自分ではなかった（別の道をたどっていただろう）と。高校の教壇で古典を教え一生を終えようとしている今、高校時代の恩師U先生もその一人だ。

その傳で行くと、あの時代もし宗麟がフランシスコ・ザビエルに出会わなかったらどうだっただろう。巷間、「たられば」は無意味な考えだというが、上に立つ大名は民百姓と違い、下々に与える影響は大きく、後の展開も全然違ったものになるのは必定。

宗麟は後に洗礼を受け、ドン・フランシスコと名乗る。彼の信条は「信仰は心の悟りの問題」とし、家来にキリスト教徒になることを強いなかったという。その故か、家中にキリシタンと神仏を信ずる者との間に軋轢が生じた。が、もし宗麟が「改宗」していなかったらどうだったろう。一枚岩でいけたのではなかったか。ここにも「たら」がある。

ここまで書いてきて、「たら・れば」をいうなら大友家には最初からこの問題が横たわっていたことに気づく。すなわち、「二階崩れの変」が失敗に終わり、父義鑑の後を異母弟・塩市丸が継いでいたらしいことだ。が、歴史が定まっている事実については今更言っても詮無いことである。

それより、私が注目したのは今に大分市にその名を残す病院「アルメイダ」のことだ。ポルトガル商人のルイス・デ・アルメイダが宣教師を伴い府内を訪れ、そこに日本初の病院を設立したのである。このことを私は布教の手段にとは思いたくない。純粹に病人のこと（治療）を思っていたことだった。

が、末の弟と宗麟について勉強した夏からずっと、ウン十年も忘れていたアルメイダの名を思い出させてくれたのは三番目の弟の入院だった。新聞社に勤めていた弟が身体に変調を来し入院。私は一度だけだったが見舞いに訪れた。そのとき、しみじみとここが宗麟ゆかりの病院か、と思ったのだった。

そんな思い出を胸にしまつてかなりの年が経った平成二十八年の夏、地元紙に宗麟を主人公にした小説『宗麟の海』（安部龍太郎）の連載が始まった。宗麟の一代がほぼ私の脳裡にあったから、そのおさらいの意味もあつて毎朝朝刊の届くのが待ち遠しかった。

私は学生時代から欠かさず新聞小説を愛読してきた。勤めている時は同僚とそれを話題にすることはしょっちゅうだったが、退職してからは話す相手もなく、何か物足りないものを感じていた。宗麟についても話題は事欠かないのに。

例えば、信教の問題。今日本では憲法によって信教の自由が保障されているが、昔はそうではなかった。そんな時代にキリスト教の教義を理解しそれに帰依するにいたった道程、そんな宗麟のことを話題に

すれば、簡単には結論も出ず楽しい時間が過ぎせるのではないだろうか。

それはともかくとして、末の弟は小学五年の夏の宿題がきっかけか、歴史に興味を持つようになった。私は夏・冬の帰省には彼のために「太閤記」や「義経記」といった歴史物を土産にした。その後大学で史学を専攻し、大学院まで進んだ。卒業後は高校で教鞭を執ったが、これも「宗麟」の宿題がそうさせたのだと思うと、人の運命の不思議を感じるのである。

【評】「宗麟への熱い思いでエッセー」

宗麟を知るきっかけが大学時代の弟（小学生5年生）との何げない会話、弟への知ったかぶりからであつたというエピソードは微笑ましい。82年の著者の人生と「宗麟」の関わりが簡潔に描かれている。折に触れて示される歴史事象も的確であり、まさに「私と大友宗麟」というテーマを貫徹させている。

大友宗麟終焉の地

神戸市須磨区

加来 安代

平成二十九年の真夏。蝉の聲が降り注ぐ中、私は一人、津久見市の大友公園に居た。ここに大友宗麟の最後の奥方ジュリア（奈多夫人の女中頭）とともに最期を迎えた館があつた場所だ。海拔三十メートルの小高い丘にある狭い場所である。

東に豊後水道に面したリアス式海岸、眼下には津久見を囲むように鎮南山、姫岳、碁盤ヶ岳、彦岳と、六百メートルから七百メートルの

山地が連なっている。セメント工場がなければ、穏やかで美しい小さな漁港である。(その当時は、日本一の埋蔵量のある石灰岩が眠っているとは知らなかったと思う。)

長年、私の中に疑問があった。規模の大きな大分の府内城、臼杵の臼杵城を選ばず、なぜにこのような小さな場所を終焉の地にしたかということだ。全盛期には、九州六カ国を支配し、「豊後王」としてヨーロッパ中に名前を知られる大友宗麟である。ドイツの城には、ザビエルと謁見する絵画さえ残っているのだ。

そういう人物は、たとえ身の危険があったとしても自分の基盤である大きな城で、多くの家臣に傳かれ、優秀な医師に看取られるのが一般的ではないだろうかと思っていた。しかし、大友宗麟は、その真逆を自ら選んで津久見の地の小さな館で死を迎えた。

疑問であった。その私の疑問に私なりの答えを見つけ出すことができたものがあつた。大友宗麟を書いた様々な歴史書のほかに、宣教師ルイス・フロイス日本史(中央文庫)の著書である。この文庫本は全十二巻あるのだが、その中で大友宗麟編として三巻もの著書がある。いかに大友宗麟がその当時の宣教師たちに重要視されていたかがうかがわれた。

戦いに明け暮れた戦国時代。下剋上もあり、明日の自分の命さえわからない日々を送る中、最初の試練は、宗麟五歳の時の母親の死から始まったと思う。

まだ幼い宗麟にとって母親の死は、不安と喪失感が芽生えただろう。さらに長男に生まれ、いずれ大友家の家督をつぐはずの宗麟は異母兄弟の塩市丸にその立場を危うくさせられた。それは自分の命が絶たれるということでもある。幸いに「二階崩れの変」で父、継母、塩市丸は亡くなり、宗麟が大友氏二十一代当主となった。

命が救われた時の宗麟の気持ちは、いかばかりだっただろう。この

命にかかわることは、あとに宗麟がキリシタンになる礎を作ったような気がする。

死期が近づいた枕元にマリア像を置くと宗麟は決して目を離そうとせず両手を合わせて拜んでいたとルイス・フロイス日本史の中にも書かれているが、マリア像は亡き母親の面影をその中に見たからだろうか？母親は愛と尊敬そのものである。

宗麟は、文化人としての才能もあり、書画、茶道、能、蹴鞠などに精通し、中央の有名な文化人を豊後に呼び寄せたりもしている。それだけ感受性が強い人だったのだ。

十六歳の時に出会った西洋医師「ポルトガル商人」の影響を受け、南蛮文化に興味を持ち始め、府内に日本初の総合病院の建設、西洋音楽、演劇、さらには大砲を輸入したりもしている。そのことは府内を国際貿易都市として発展させた。新しいものを取り入れる柔軟な発想や、異国との貿易などのグローバルな視野も持ち合わせた宗麟の人間としての器の大きさは、ある面、モノの本質を見るところという繊細さもなければ成しえなかったことだと思う。

ルイス・フロイス日本史に、大友宗麟の最期の様子が記されている。「豊後の国の人々が、国王の病態が悪化しつつあることを知るに至りますと、おびただしい数の人々が国王を訪れるようになりました。(略) 彼らは国王の病が続いた十六日間というもの、毎日、日に三回も教会に押しかけてきました」。その人々は、宗麟の病が快復するようにと、宗麟が最後の地を選んだ津久見で祈りの日々を過ごしたのである。

人間は、その人物がその人生をいかに生きたかという証が、亡くなる前から亡くなった後の人々の想いや行動でわかると聞いている。大友宗麟は、豊後だけでなく日本国中、ひいては海外の人々からも慕われ尊敬されていたことが、ルイス・フロイス日本史から推察された。

カリスマ性がありトップに君臨する人間は孤独である。「豊後王」ともてはやされても、宗麟の中には真の魂の繋がりを求めてやまないものがあつたように思える。

それは、お互いの中の愛と尊敬ではないだろうか？ルイス・フロイス日本史によると、津久見の人たちは皆、キリシタンだった。終焉の地に津久見を選んだ宗麟は、やっと魂のやすらぎを得た。

【評】 神戸市在住の筆者が、宗麟終焉の津久見の地を暑い夏の日に訪問したところから、話ははじまる。現地に立つた筆者はそこで長年の疑問について想いをめぐらすことになる。なぜ府内でも、臼杵でもなく津久見を終焉の地としたのかを。その謎を筆者なりの答えを見つけたそうとするプロセスが描かれる。自身が調べた歴史事象も記述されるが、その歴史事象には必ず筆者なりの想いや考えが添えられる。そしてたどり着いた筆者の答えは、「カリスマ性があり、トップに君臨する人間は孤独である。(略)自分と同じ愛と尊敬のキリシタンの理想郷を作る志を持つ人々のそばで最後をむかえたかったのではないであろうか」。読んでいてストレスなくすんなりと腑に落ちてくる。かなりな文章力である。

臼杵で発見の「石祠」が語る、

宗麟の子どもたちの数奇な運命

臼杵市井村

桑原 英治

宗麟の娘婿「一条兼定」の石祠に出会う

キリシタン大名と称される大友宗麟の知名度は、大友氏顕彰会をはじめとする、有志の方々のご努力により、とても高くなった気がしま

す。筆者は、大友氏がなぜ、辺境の地といつてもよい豊後国で、九州六ヶ国を統治するほどの戦国大名になれたのか、ずっと疑問を持ち続けていました。しかし、その栄光の証を見出したいと思っても、大友氏の歴史的痕跡は、実に少ない気がしてきました。

一方で、中世の史実を知るにつけ、「除国、滅亡の運命となった大友氏」への思い入れは、強くなっていきました。安泰な年月より、苦闘の連続だった400年の歩み・真実を、より浮き彫りにしてみたいと思いました。とりわけ、大友氏滅亡の一族と家臣たちは、その後どう生きたのか、さらに、末裔たちの現在をも伺い知ることができればと、興味は広がるばかりでした。

その関心を、より掻き立てられたのは、40年ほど前に、臼杵市芝尾の中山古墳を訪れた時からでした。墳丘の竹藪の中に隠れるように鎮座していた「石祠」が眼前に現れ、銘版にひとときわ大きく、「一条中納言泰政公」と刻字されていました。右に併記されていたのは、なんと、「大友宗麟の次男親家」と「娘婿の清田鎮忠」であることを知りました。最も気になったのは、左端に、「泰政公之姫君霊」と記された小さい文字で、何かを語りかけているようでした。祠に纏わる幾つかの疑問を抱えながら、年月が過ぎました。

キリシタン一族の深い謎

一条泰政(別名兼定)は、摂家ながら土佐に下向し、公家大名として勢力を拡大した土佐一条家の五代目当主です。しかし、台頭した長曾我部氏に、土佐を追われ、一時期、臼杵に滞在していました。兼定の妻は宗麟の長女でしたが、離縁して、宗麟の重臣清田鎮忠に再嫁しました。大友親家は利根川道孝のことで、大友氏が改易後、客分として、肥後の細川家に移った人です。

祠の銘板と向き合うなかで、次々と疑問がわき出てきました。なかでも、「泰政公の姫君」とは誰なのか？祠は誰がこの地に建てたのか？

なぜこの4人なのか？兼定でなく、なぜ「泰政」なのか？利根川道孝はなぜ、大友親家と記されないのか？天正六年三月十八日の日付は、何の日なのか？

何とか、これらの答えを見つけようと思いました。疑問を解く鍵として浮上してきたのが、「キリシタンとして生きた証」ではないか、ということでした。

一条兼定・大友親家・清田鎮忠夫妻は、大友一族のなかでも、いち早く、キリシタンになりました。兼定は最後、戸島に隠棲し、悲しさを残す生涯を送りましたが、その信仰は純粹であったと評されています。親家は、「悲惨な運命に立ち至り、…過去の不品行の償いをし、キリシタンに戻った」と書き残されています。晩年は、転びとなりましたが、迷いの一生だったのでしょうか。鎮忠は、多くの戦功をなした武将でした。夫妻には、2人の娘が生まれましたが、2歳の娘の死を機に、キリシタンとなりました。洗礼を受けたもう1人の娘は、成長した後、キリシタンで知られた「志賀親次」の弟・清田鎮乗を養子に迎えたとあります。豊後国内の混乱もあり、清田鎮忠夫妻は、追われて長崎に隠れ住み、江戸期をここで生き、この地で亡くなりました。

祠をよく観察すると、「隠れキリシタン墓碑」の特徴が見えてくるのです。石祠の扉には、三角形の窓、手前には幼い姿の仏像が置かれ、隠れキリシタン時代の神像・オメガ仏と酷似しています。祠は、近づき難い古墳の裾に建っています。神名板に「当家之祖先」とあり、江戸時代に改名した「利根川道孝」になっていることから、キリスト教禁令下の徳川時代、それも、禁教が緩やかになった江戸中期以降の建立ではないかと推察しています。

祠の解明に新たな展開

調べる過程で、宮崎県の研究会史料が目にとまりました。未知の世界だった兼定の子孫のことが載っていました。眼からウロコでした。

これまで、兼定の子どもについては、内政と按察使の局の二人が知られていますが、他にもいたのです。その地は、伊東マンショで有名な日向飢肥です。兼定の長女・按察使の局は、大奥の老女となっていて、何かと飢肥伊東家の世話をしています。兼定の末子に、飢肥藩士となつた「兼政・（高嶋主殿頭）」という人物がいたとされています。子孫に高嶋五郎兵衛、高嶋十郎右衛門、等の名もありました。祠に「当家之祖」と記したのは、飢肥の子孫が関係しているのではと。兼定でなく泰政なのは、子の兼政（内政含め）に連なる子孫が、愛着を抱く、若き良き時代の「泰政」の名かと、思いたくなります。

謎に近かつた祠の建立の目的と、「姫君」についても、少し光がさしてきました。史実から確定したいと思ひ、次のように推察しているところですよ。

・祠に記された月日は、2歳でよう折した娘の命日ではないか。
・宗麟の長女（洗礼名ジュスタ）が、兼定と離縁し臼杵に帰る時、幼子を連れていた。後に、長崎へ逃れ、宣教師支援の罪で火炙りにされた「マグダレナ清田」ではないかと。大友一族のなかで、唯一人殉教した女性です。

祠に「泰政公の姫君」とあり、父は兼定でなければなりません。想像を膨らませれば、他の3人にとって、また建立者にとつても、姫君は、兼定の妻であり、鎮忠の妻であり、道孝の姉である宗麟の「長女・ジュスタ」とも考えられます。彼女は、長崎でキリシタンとして寂しく亡くなっています。敢えて「泰政公乃姫君霊」とし、禁教下ゆえに、宗麟の長女であることを隠したのでは。建立者は、大友家の血筋もつ「姫」が、先祖に存在したことを家系の誇りとして、生き抜いた人たちと想像できます。

・兼定の二人の妹は、飢肥藩の当主夫人と、飢肥藩士（かつての大友重臣の田北、吉弘氏）とも、縁者となっています。祠の建つ臼杵芝

尾は、吉弘氏が移り住んだ村です。芝尾村に、隠れキリシタンがいたことも記録にあります。石工の村・芝尾での石祠造立は、困難なことではなかったでしょう。

清田鎮忠の孫娘が、細川忠興の夫人に

エピソードになりますが、歴史の展開は予想もつきません。大友家の重臣たちで、肥後細川氏に仕えた武士は、少なくありません。特筆すべきは、清田鎮忠の子孫は、熊本肥後の藩主の血脈に受け継がれていったことです。前述の清田鎮乗夫妻から生まれた息女は、細川藩主忠興の夫人(側室)となります。その名は「機知」。細川忠興の正室は世に広く知られたガラシャ夫人です。機知は、宇土支藩三万石の祖・細川立孝と、刑部家(二万五千石)の祖・細川興孝の母となります。後に本家の男系が絶えた時、宇土支藩から養子に二度ほど入っているので、肥後の殿様は、機知の血が流れています。

「肥後細川藩は、豊後大友氏の血縁」なのです。余談になりますが、ガラシャの娘の多羅は、臼杵に嫁いでくると、宣教師たちを厚遇し、教会を中心に各地に教会や修道院が開設されたといえます。

小さな祠から垣間見えてくるものは、まことに深く、スケールの大きな大友家の歴史であります。

【評】 筆者はかなり大友氏について詳しいようである。顕彰会会員さえも知らないことを記述している。特に現在の細川家が大友宗麟とつながりがあると解明。小さな祠からスケールの大きな大友家の歴史を紐解く独特な歴史観とその説明が見事。また、兼定の妹は田北鎮周の妻となり、鎮周死亡後その娘は吉弘統幸の弟・統員と結婚、田北氏本流を継ぐ。大友氏滅亡後は飢肥の伊東氏に身を寄せたのであり、そのような示唆もしている。その豊富な知識を世に広めたく是非大友氏顕彰会の活動を共にお願いしたいものだ。

様々な文化や医学、思想を取り入れた稀代の教養人

大分市

佐藤 圭(県職)

3月22日、転入手続きのために訪れた市役所の中で呆ける。

それもそのはず、連休明けと転居シーズンという凶悪タッグが組まれたその日は人でごった返しており、1時間経っても自分の番号が呼ばれることはない。1時間半経ったあたりから、流れ作業のようにカウンターに呼ばれてはしばらく待つを繰り返す。最初こそ、人間的な感情を持ち合わせていた私も、そのうち無気力に漂う存在と化す。157番が自分の名前だと誤認し始めたころ、やつのことで手続きが終わり、本来の自分の名前を思い出した私は歩いて帰宅することにした。知らない道も増えている。地元銀行のソーリン支店なる建物もできていた。様変わりした様子に地元ではない感覚を覚えながらも、この支店名が大友宗麟公から取った名だと分かるのは、まだ私が大分県人と言って良い証左だろう。自宅近くの新しい道で少し迷子になったことには目を瞑って頂きたい。

13年振りの大分生活、よろしく大分県。

長い県外生活の中で大分を感じることは数えるほどしかなかった。その一つは、読んでいる漫画の作者が大分県出身だと気付いたときだ。私は作者が大分県出身だと知る前に、大分県出身であることに気付いたことが2回ある。若杉公德先生(代表作…デトロイト・メタル・シテイ)、あずみきし先生(代表作…死役所)の両名は、作中のキャラクターが話す方言が非常にナチュラルな大分弁であり、もしかして、とウイキペディアで答え合わせをした。私のケースは少々特殊かもしれないが、仕事相手が同郷だと判明し、妙に親近感を覚えるというような経験は誰も一度はあるのではないか。

郷愁を覚えるキツカケとして人が介在し、人こそが郷里たるものをぼんやりと形造っているときえ思っている。

昔の人もそうだったのだろうか。

「てやんでい。豊後って誰か有名な人はいるのかい？」

と田舎者を馬鹿にしたように聞いてくる江戸っ子と、

「大友宗麟公がおるっちゃ。家の場所も知っちゃよんけんなあ」

としたり顔で答える豊後っ子がいたのだろうか。

脳内再現しただけなので、当時の宗主である宗麟公の自宅（臼杵城？）なんて誰でも分かるだろという指摘は的外れだ。ちなみに地元が同じで同世代の指原莉乃さんに対しては、これの指原さんバ―ジョンの会話を数えきれないほど擦らせて頂いた。いつかまた総選挙なるものがあるならば、2票くらい入れてあげよう。当時は、今の指原さんの如くインパクトがあった（と思われる）宗麟公であるが、現代においてはどこまで認知度があるのだろうか。大分の著名人として名前を挙げる事ができる人がはたしているのか。

・・・いや、一人いた。当時働いていた会社の先輩に、大分出身だと告げたところ、

「佐藤くん、大分と言えば大友宗麟やん」

と言われたことがあった。詳しいっすね、と言った私に、

「佐藤ちゃん、常識やでジョ・ウ・シ・キ★」

先の会話から5秒後である。関西人の距離の詰め方はインファイターのそれだ。言い方のウザさは彼の素質だと思われる。禿げてくるくせに詳しいやん！、くらい踏み込もうかと思案している私をよそに、

「でなあ。大友宗麟が好きすぎて、生まれてくる息子の名前、麟太郎にしよ思ってたんねん」

ボケだとしたら、一度墓石に手を合わせに来た方が良い。いや、本当に名前を借りようとしているならば、尚更手を合わせにくるべきだろう。そう伝えると、

「行けたら行くわ」

と期待を裏切らない回答。大事なことなのでもう一度言う、たこ焼き国の人は期待（フリ）を裏切らない。彼が大友宗麟公のどこを崇拜していたのか分からず終いであったが、大友宗麟公がキリシタン大名として豊後を治め、宗教観を始めたこと、様々な文化や医学、思想を取り入れた稀代の教養人だったことは、稀代の無教養人である私ですら知っている。

21世紀は多様性の時代だと言われているが、紛争、ヘイトスピーチ、環境問題、新しいテクノロジーの台頭など、従来やマジヨリテイの価値観とは違うものとどう向き合っているかがテーマのように強く感じている。

確かに大友宗麟公には、豊臣秀吉公の草履を温めておくデキる部下系のエピソードもなければ、キング牧師の「I have a dream」のようなパンチラインも持っていないかもしれない。しかし、彼の生き方には21世紀を生き抜くヒントが隠されているに違いない。

こんなとき大友宗麟公ならどうするか。

「色んな人がおっついていいやん」

「とりあえず受け入れてみようや」

そんなことを言ってくれるのかな。400年の時を超え、大友宗麟公と対話するため、墓石に手を合わせに行きたいと思う。

間違えた。行けたら行くわ、と切に願ひ、筆を置く。

【評】 筆者は13年ぶりに大分に帰ってくる。転入手続きという日常の風景。大分銀行ソーリン館の名前に反応する。長い県外生活で、大分の著名人がいないというコンプレックスを感じる中で、かつて働いていた会社の関西出身の先輩の「大分といえば大友宗麟やん」という言葉に勇気づけられ、また驚きを隠せない様子が面白い。文書構成・切り口ともに秀逸である。

私の大友宗麟

東京都練馬区

鳥谷 靖子

東京、旧豊島遊園地の裏手に春日町という町がある。約四十年前、越してきた時、故郷と同じ春日町という地名にホッとしたのを思い出す。近所に春日神社まであった。数日後訪ねてみると、小さな社が一つひっそりと建っていた。

私は、昭和三十年代まで、大分市春日浦(現在勢家町)で育った。春日神社と別大国道の間にある住宅地、歩いて数分で神宮寺浦公園があり、そこに建つ大友宗麟の銅像の周りで遊んだ日もあった。子供心に侍姿で刀を杖のように持ち、首には十字架を架けた姿を不思議な気持ちで見上げたのを覚えている。高校生になると、飼い犬と別府湾に面した白灯台に散歩に行き、春日浦の海や湾の景色を眺め午後を過ごしていた。

十年前、近所の友達四人とポルトガル旅行を計画、皆でポルトガル語の簡単な会話の勉強会を開く。『おはよう』は『ボン・ディア』、『こんにちは』も同じ『ボン・ディアよ』。大分のお菓자에ボン・ディアが

あり、ザビエルも昔から知られているお菓子だ。故郷とポルトガルの縁を感じた。

旅に出て、リスボンのテージョ川沿いにある大航海時代の船のモニユメントにフランシスコ・ザビエルを発見。彼はこの港から何年もの時をかけて旅をし、日本まで布教に来ていたのだと実感した。翌日、バスの中で通訳が「日本にキリスト教を伝えたのは、ポルトガルです。アルメイダという医師が、初めて日本に病院を建設し、その記念行事の通訳として日本に行ってきました」と話した。バスが停車した時、「先ほどの話は大分市の事ですすよね」と聞くと、「そうです」との返事。故郷が世界に知られる町だったのだ。大友宗麟の時代、多くの外国の船が大分の港に停泊し、南蛮貿易で栄え、九州の六ヶ国を統治していた歴史が脳裏によみがえってきた。

宗麟の人生を辿ってみたくなり、さっそく本を購入し、読み始めた。少年時代、宗麟は父親から疎遠にされ、義母は批判的で冷淡。孤独な環境で育った彼は、上野原の屋敷から馬を飛ばし、沖の浜(春日浦)で海を眺め、当時停泊していた外国船を見ながら好奇心で胸を膨らませていた。

二十一歳の時、「二階崩れの変」で家督を継ぐ事になる。時は戦国時代中期、内外共に難しい国の統治が若き宗麟に任された。幸い忠実で勇猛果敢な家臣たちに恵まれ、彼自身、明晰な判断力も備わっていたため、難局を何とか切り抜けることができた。翌年、当時、山口に滞在中のフランシスコ・ザビエルを招聘する。ザビエルが豊後に滞在したのは二ヶ月に過ぎなかったが、彼は宗麟に跪(ひざまず)き、謙虚で慈愛の籠った澄んだ瞳で語りかけた。彼の口から出る聞いたこともない基督教の教えは、宗麟の心の奥深く感動と畏敬の念を留め、その後彼の人生に大きな影響を及ぼしていく。

南蛮船が豊後に寄港し、貿易開始と交換条件として基督教の布教と

教会の建立も許可された。ポルトガル人の医師で宣教師でもあったアルメイダが主治医となり、友情も育まれていった。

南蛮船が沖の浜に停泊すると、春日神社の境内に陸揚げした品々を売る市が出来、賑わったそうである。

乱世の時代、豊後も戦乱の嵐に巻き込まれた。門司城の戦いに敗れると「それ見たことか、異教にうつつを抜かせたせいだ」と非難される。重臣たちの強い諫めもあり、国政の立て直しのため、宗麟は京都大徳寺から高僧を導師として招き、寺を建て出家した。数ヶ月後三方海に囲まれた臼杵の丹生島城に家臣とともに移る。臼杵では南蛮貿易に力を注ぎ、教会や司祭館を支援し、宣教師と交流する。仏門に入ったが受け入れることはなかった。

長男の義統が成人し、家督を譲った後、宗麟四十八歳の時、キリスト教の洗礼を受け、ドン・フランシスコとなった。数百年続いた大友家は豊臣秀吉の時代、義統で終焉を迎える。

乱世の時代、宗麟の国を守り抜いた責任感。高い目標を持ち、南蛮貿易を成功させた先見性。未知の宗教だった基督教を容認し、みずからも信じた勇氣。時に見せた彼の弱さや危うささえ、一人の人間として共感できた。

大分を愛し、大分にルーツを持つ人々に、彼が世を去って約五百年の歳月が過ぎ去った今、時空を超えて語りかけている気がする。「失敗を恐れず、夢や理想を持って新しい事に挑戦しなさい」と。

故郷を遠く離れ、懐かしく思い出すのは、別府湾や美しい山々の景色だった。然し今、大友宗麟の時代と育った大分の町が重なり、感慨深い。何気なく通り過ぎていた春日浦周辺が、中世、沖の浜と呼ばれ、様々な人々が行き交う国際都市だったと思うと、故郷がより誇らしく思えてくる。

【評】子どもの頃、家の近所で目にしていた春日浦の大友宗麟像。筆者は不思議な気持ちで見上げていた。ポルトガル旅行に際し、故郷とポルトガルの深い縁を知り、故郷大分が当時世に知られる町だったことを知る。

そして宗麟を調べるようになる。その内容の記述も説明的な表現にならないような配慮がみられる。その結果、宗麟の責任感、高い目標、南蛮貿易の成功と先見性、キリスト教を容認した勇氣を認め、その一方で、人間的な軟さや脆さに共感する。そして、こうした事象を時空を越えた宗麟からのメッセージと捉え、当時の繁栄に想いを馳せ、故郷への誇りを取り戻している。※文中、彼が世を去って約五百年は、約四百五十年。五百年を生かすなら生誕とし、それは2030年である。

大友宗麟と私

竹田市玉来

船橋 智久(46歳)

子どもの頃、コンピューターのシミュレーションゲームがはやった時期がありよく遊んだものである。人気はやはり戦国シミュレーションゲームである。シミュレーションゲームの醍醐味は自分が好きな戦国武将を選び、その主人公に自分がなりきって天下統一を迫体験できるところである。当時、私は千葉県に住んでいて、好んで選んでいたのは織田信長や武田信玄、伊達政宗などといったどちらかというと東方の武将たちである。それゆえに、西方の武将、毛利や大友、長曾我部といった武将は制圧すべき対象であって、一度として西方の武将を選んだことはなかった。

そんな私が縁あって大分に移住してもう三年になる。そこであらためて大友家ならびに大友宗麟のことについて調べることにした。大友宗麟のことを調べていけばいくほど、私の頭の中で、ある違和感が増幅されていった。それは、大友宗麟は戦国大名といえるのだろうか？という疑念である。もちろん、宗麟は最盛期には九州六カ国を統治した実績があり、言うまでもなく西日本有数の戦国大名である。ただし、それだけではおさまりきらない個性が宗麟には感じられた。その個性とは何か、思い切って3つのキーワードに絞り込んで読み解いていきたいと思う。

まず、宗麟の個性を特徴づける最初にして最大のキーワードは**好奇心**だろう。キリスト教をはじめ、諸外国の文化や物を積極的に取り入れたのはまさに宗麟の好奇心旺盛さによるものである。日本という枠にとどまらず、日本以外の世界を見てみたい、世界にある良いものを知りたいという根源的な強い欲求を感じる。そして、宗麟の違うところはただ良いものを知ったり、集めるだけでは終わらないところである。例えば、西洋の優れた医術医学は、西洋的病院というかたちで豊後の国造りに取り入れて民衆の生活レベルの改善向上に役立っている。その意味で、宗麟はただの新しいもの好きではなく、新しいものを取り入れて定着させようとする経営的センスを持ち合わせていた人物ともいえる。

2番目のキーワードは、**鈍感力**である。戦国時代は、今と違って外国の人々や物の往来が頻繁ではなく、民衆の異国や異国人に対する免疫というものは相当低かったと思われる。そんな空気感の中で率先して異国の文化を取り入れ、異教の布教を認めるという決断はなかなかマネできるものではない。まさに鈍感力の為せる業であろう。これは、やはり宗麟の根っからの好奇心が人並み以上に強かつ

たからだろうと推測できる。また、キリスト教を認めながらも仏教も大事にしていたことも忘れてはならない。そもそも宗麟という名前自体が仏法の道へ進む決心をして出家した時の名前ではないか。これもまた鈍感力の賜であろう。宗麟の行動を見てみると、あれかこれかではなく、あれもこれも良いものとして受け入れる度量の大きさを感じ取ることができる。余計な先入観がなく、物事をフラットにみて判断出来ている。その意味ではもし宗麟が今の時代に舞い降りて来ても、意外にすんなりと遵法してスマホやSNSをつかいこなしているかもしれない。

3番目のキーワードは、**行動力**である。いくら好奇心が強く、鈍感力があつたとしても、実際に行動に移せる人は少ない。宗麟は府内藩主としての権力があつたからこそ実行できたともいえるが、権力があるがゆえに反発が大きいことも考えられる。それを、乗り越えて行動に移せたのもやはり好奇心の強さが勝り、様々な障害やしがらみをモノとも思わない鈍感力があつたからこそである。もう一つ、豊薩戦争で島津軍が攻めてきた時に宗麟自ら、大坂城に出向いて秀吉に助けを求めたわけだが、これもなかなかできることではない。戦国武将というのはとてもプライドが高い。どんなに苦境におかれても、自力でその状況を打開していくイメージが強い。それをもあつさり、虎の威を借る狐を演じることを良しとした行動力はすごい。

以上、3つのキーワードで宗麟を総合して考えてみると、一つの人物像に収斂されていく。それは、宗麟は生粋のコスモポリタンということだ。どの時代、どの国に生まれても、変わることはない普遍的な哲学・審美眼を持ち、物事を判断し、行動できる人物だということである。私が最初に抱いた戦国武将という呼び名が宗麟に似

合わない理由もそこにある。武将というよりは、現代的に言えば豊後国のカリスマ経営者とも呼ぶべきだろう。

歴史のことを色々学び直していくと、久しぶりに戦国シミュレーションゲームをしてみたくなった。今度は、せっかく色々調べたので宗麟を選んでみたい。もし、宗麟が天下統一を成し遂げていたらどんな世界、どんな日本になっていただろうか。府内が首都になり、大分弁が標準語になり、日本中でよだきい、しゃーしいなどの言葉が飛び交っているだろうか。想像するだけでも面白い。

【評】 大分に移住してきて3年の著者が、子どもの頃のシミュレーションゲームにより戦国武将に興味をもつようになったが、当時西日本の大名を選んだことがなかったことを想起し、大分との縁を機会に大友氏、宗麟のことを調べはじめたことを記している。その結果を3つのキーワードでまとめ、自身にとっての宗麟への想いを綴っている。そのひとつが「好奇心」、これを経営的センスと読み替えている。2番目は「鈍感力」、これを先入観のないフラットな判断ができる背景としている。3番目が、1番目と2番目を踏まえ「行動力」とし、宗麟を生粋のコスモポリタンと位置づけている。豊後国のカリスマ経営者ともいう。最後に子ども頃の思い出し、宗麟を主人公にしたシミュレーションゲームで締めくくり、宗麟が天下統一をなし遂げた時の姿を現代と重ねあわせて面白がっているところも好感がもてる。文章の構成がしっかりしている。

私の大友宗麟

大分市錦町

三宅 英明(76歳)

聡明英知、繊細な心配りと行動力。戦国期のどの大名よりも進取の気概旺盛なキリシタン武将。豊後大友氏の最盛期を造り上げ、その版図は九州豊筑肥、日向半国と南予にも及んだともいわれて、我が郷土の大先哲の第一番目に挙げられる大友宗麟公です。

薄れゆく幼いころの記憶の中に、「大友宗麟」「南蛮文化」「キリシタン」などの言葉の意味を知る端緒になったのは、もう70年も前の小学校入学のころです。私の通った戸次町立(現大分市立)上戸次小学校で、いつも歌っていた校歌の一節、「歴史は長き つるが城 小鳩はばたく上戸次：」。現在でも忘れ得ぬ愛唱歌で、時に口ずさんでいます。

入学直後のお見知り遠足で、毎年訪れる目的地は、学校の隣接集落の利光地区の鶴賀城址です。急峻な山頂の荒城址で、雑草や疎林の中でした。かつて、約450年ほどの昔、天正年間に日本合戦史上にも残る戸次川合戦。その前哨戦で、北上を続ける薩摩軍と大友要害を死守する、鶴賀城の若き城将利光宗魚鑑教軍との攻防の地です。登城途中には、戸次川合戦で壮烈な死を遂げた、長曾我部信親や十河存保など、土讃連合援軍の戦士が眠る山崎の丘の墓地で合掌します。そして急坂の古城址へ。昼食前でも城址の辺りは遊び場です。

友達との楽しい遠足弁当の後、先生方があの大合戦のお話。城主利光宗魚は熱心なキリシタンだったようだとか、薩摩郡の一部は、この地から大友宗麟の守る臼杵城に転戦。宗麟軍は、国崩しと言われた大砲で迎え撃った、などの武勇伝を教えてくださいました。

遠足目的地では他にも、南方の影の木集落の、通称「一本松」。この辺りは合戦時の日向道で、薩摩軍が陣立てを整えたとと思われる山頂広場。そして現在では「吉野の梅まつり」で知られる吉野地区の「梅の

木天神(天満社)」。宗麟公が神木の梅の木を手折らせると、現身の天神様が怒り、この梅の木で仏像を刻め!と、宣い利光宗魚の配下が貢納した、などの民話、伝説を聴いたものです。

その後、私が中学生になる前、叔母の嫁ぎ先の集落の古い墓地の墓石に刻まれた十字架やローマ字の陰刻が発見され、私も興味深く訪れたものです。

それ以来、「大友宗麟」や「豊後キリシタン」の話や文献を知ると、なぜだか胸が弾むのを感じる小学生時代でした。

中学校の社会科担任教師は、日本史関係に秀で、特にキリシタンに詳しく、私にとっては耳新しい西洋文明も含めた知識を与えてくださり、「大友宗麟」の魅力も増えました。

月日は流れ、折に触れ目に触れながら、いつしか「大友宗麟」「南蛮文化」を生涯学習の一つと位置付け、書籍を読み漁り、かの地を訪れたり、各種講演会に顔を出し続けています。最近では「大友宗麟公」の功罪を考えることも増えた気がしています。

余談ですが、私にとって少し自慢できそうな出来事を綴ります。

昭和54(1979)年頃ですが、私の大好きだった、朝日放送テレビ番組「クイズタイムショック」の全国放映番組に生出演できたことです。大分市での地方予選で3名が選出されたのですが、その時の自己紹介・プロフィール欄の中で「あなたが一番楽しみにしている夢のようなことは何ですか」の問いに「中世の頃、私の住む大分市は豊後府内と呼ばれ、大友氏治世でした。上原館址と言われる場所は現存しますが、江戸時代の古絵図に描かれている大友御屋敷と言われる場所は、まだ見つかっていません。早く見つければ」と、綴っていましたら、放映本番の時、司会者の俳優「山口崇」が、

「ところで三宅さん、もう一つの大友屋敷は見つかりましたか?」と問うのです。あわてて私の答え「山口さん、そんなに早くは見つかり

ませんよ」。

今から40年前のことで、市民の話題の端にも上らなかつたことを、大俳優と直接会話でき、全国発信できたことを思い出します。

その後、大友宗麟没入の私は、「大友宗麟と南蛮文化を学ぶ会(ふらんしすこ)」の仲間と小田原市の大友郷、山口市大内館、安心院竜王城、岩屋城見学、神宮寺浦宗麟公まつり、歴代大友氏墓所めぐり、記念植樹などを経験したり、顕徳町一帯の大友氏遺跡へ向けた署名活動、大友氏河原市の再現など。また、私個人としても大分合同新聞読者の声で大友氏を発信すること二十余年。大分市観光ボランティアガイド歴約15年。ご案内した全国の観光客からお便りも届きます。

朝な夕な、我が家に届く「ミゼレレ、メイデウス」の澄んだ音色。至福の時の流れです。

8年後には宗麟公生誕500年に向けて進められている大友館中心建物等の復元を含む「大友氏遺跡公園」が整備されるでしょう。

2年前、復元整備され、四季折々に趣を異にする風景を醸し出してくれる壮大な大友氏館跡庭園。いつの間にか大友宗麟公とは慣れ親しんだ友人のようにさえ感じる私なのです。

【評】 内容がテーマにキッチリ沿っている。筆者自身の人生の中での宗麟との関わりが臨場感タップリに描かれており、ひとつの人生ヒストリーとなっている。タイムショック出演のエピソードなどは、まさに大友氏顕彰の歴史の1コマと言えるだろう。宗麟愛に溢れた構成と内容になっている。ワクワクしながら読みすすめることができる。構成も申し分ない。